

テサロニケ人への手紙第一5章「主の日からの救い」

1A 昼の子ども 1-11

1B 突然の破滅 1-3

2B 救いの望み 4-11

1C 身の慎み 4-8

2C 共におられる主 9-11

2A 互いの間の平和 12-22

1B 訓戒の働き 12-15

2B 喜び、祈り、感謝 16-18

3B 預言の賜物 19-22

3A 最後の祈り 23-28

1B 全人的な守り 23-24

2B 最後の挨拶 25-28

本文

テサロニケ人への手紙第一 5章を開いてください。私たちは、パウロがテサロニケの人々に、わずかの間にも関わらず、かなりのことを教えていたことを手紙からうかがい知ることができます。その中でも、非常に特徴的なのは「主の再臨」です。主が、再び来られることです。1章、2章、3章の最後は、主が来られることについての約束が書かれていて、そして4章では、先に死んだ人々について、主が来られる時によみがえることについて書きました。5章はその続きです。

1A 昼の子ども 1-11

1B 突然の破滅 1-3

¹ 兄弟たち。その時と時期については、あなたがたに書き送る必要はありません。² 主の日は、盗人が夜やって来るように来ることを、あなたがた自身よく知っているからです。

「その時と時期」とは、主が来られる時のことです。その時のことについて、パウロはしっかりと、すでにテサロニケ人たちに伝えていました。書き送る必要はないとまで言っています。これは、使徒たちが、イエス様がオリーブ山から天に昇られる時に、尋ねたことです。「使徒 1:6 主よ。イスラエルのために国を再興してくださるのは、この時なのですか。」主は、「1:7 いつとか、どんな時とかいうことは、あなたがたの知るところではありません。それは、父がご自分の権威をもって定めておられることです。」イエス様が復活された後に、神の国のことを語られました。ですので、その時になったのか？イスラエルが再興する、つまりメシアがイスラエルの王となり、世界を支配することになるのか？と尋ねたのです。この希望は、旧約の預言者たちが語っていたことです。けれども、

その前に神の聖霊が注がれて、それがキリストを信じる異邦人にも及ぶという、奥義とも使徒たちが呼ぶ神のご計画がありました。ですから、聖霊が臨み、力を受け、地の果てにまでわたしの証人となると言われました。

そして、旧約の預言者たちは、その終わりの日、イスラエルの救いの日の前には神の御怒りが下る時、主の日が来ることを数多く預言しました。「イザ 13:9 見よ、【主】の日が来る。憤りと燃える怒りの、残酷な日が。地は荒廢に歸し、主は罪人どもをそこから根絶やしにする。」これは、罪人に対して、地上に神の正しい怒りを注ぐ定められた時です。その啓示にパウロは忠実になり、手紙の中にもしっかりと教えています。「Ⅰコリ 5:5 そのような者を、その肉が滅ぼされるようにサタンに引き渡したのです。それによって彼の霊が主の日に救われるためです。」教会の中で罪を犯している者を、しっかりと戒めるのですが、それは、彼の肉が滅ぼされても、霊が主の日には救われるように、ということです。ペテロも、しっかりと教えていました。「Ⅱペテ 3:10 しかし、主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は大きな響きを立てて消え去り、天の万象は焼けて崩れ去り、地と地にある働きはなくなってしまう。」

こうした時と時期について、テサロニケの人たちはしっかりと教えられていました。だから、パウロは、それ以上、書き送る必要はないと言っています。いかがでしょうか、私たちキリスト教会が教えられてきたでしょうか？ないですね。歴史的経緯があるからです。ローマ時代、その圧迫の中でユダヤ人もキリスト者も生きていました。その時は、しっかりとこの終わりの日について教えられ、その中で生きていました。だから、挨拶の言葉は、マラナタ、「主よ、来てください。」だったのです。

ところが、ローマがキリスト教を公認しました。皇帝がキリスト教の洗礼を受けました。それで、キリスト教の国家が出来ました。それで、終わりの日というのは神の国で終着するけれども、すでに神の国は来た、今が、約束された千年王国だというような見方をしていました。終わりの日の試練と患難の時は過ぎ去り、今が神の国なのだということにです。宗教改革が起こった時に、聖書をそのまま読んでいくということをして、その名残は残っていました。プロテスタント教会も国家権力とつながっていました。ですから、国や社会から圧迫される中で、主を待ち望む信仰が育たなかったのです。

今、それが純粋な形で維持されているのは、むしろキリスト教圏ではないところ、キリスト者が社会で、少数派で圧迫や迫害を受けやすいところです。主が間もなく来られるということが、彼らにとっての希望であります。ですから、私たち日本のキリスト者も、そのまま信じていいのです。私たちも、ものすごい目に見えない圧迫の中で生きています。11 節に出てきますが、互いに励まし合って生きていくのです。

そして、「盗人が夜やって来るように来る」というのは、旧約の預言で、突然の破壊について書か

れています。例えば、ゼパニヤ 1 章 14 節、「1:14 【主】の大いなる日は近い。それは近く、すぐにも来る。【主】の日に声がする。勇士の悲痛な叫び声が。」それをイエス様が、オリーブ山で盗人に喩えて説き明かされています。「マタ 24:43-44 次のことは知っておきなさい。泥棒が夜の何時に来るかを知っていたら、家の主人は目を覚ましているでしょうし、自分の家に穴を開けられることはないでしょう。ですから、あなたがたも用心していなさい。人の子は思いがけない時に来るのです。」思いがけない時に来る、というのが、ご自身が来られるのを盗人に喩えた理由です。いつ何時、来るか分からないと主が言われたことを、「ずっと後に、何百年も後に来るかもしれない」とかするのが、いかに間違っているかが分かりますね。盗人が来るのは、何百年も後かもしれない、なんて言わないでしょう？いつ来てもおかしくない、と用心するはずです。それが、いつ何時、来るか分からないと主が言われた理由です。

³ 人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき、妊婦に産みの苦しみが臨むように、突然の破滅が彼らを襲います。それを逃れることは決してできません。

主は、ご自分の教会のために天から降りて来られる日は、このようにいつ何時か分かりません。そして教会が天に引き上げられて、主の日が襲います。教会が、光としてこの地上にある時は、教会が聖霊によって、悪魔がこの地上で猛威をふるうのに歯止めになっています。しかし、教会が取り除かれれば、不法の人、すなわち反キリストが現れて、世界が最悪の状態になるのです。

「人々が「平和だ、安全だ」と言っているとき」という言葉は、エレミヤ書に出てくる言い回しです。「エレ 6:13-14 なぜなら、身分の低い者から高い者まで、みな利得を貪り、預言者から祭司に至るまで、みな偽りを行っているからだ。彼らはわたしの民の傷をいいかげんに癒やし、平安がないのに、『平安だ、平安だ』と言っている。」エレミヤが預言した時は、バビロンによってエルサレムが破壊される間近にいました。そして神が、バビロンを裁きの器としてユダを裁かれるみこころも、エレミヤには示されていました。彼らの傷が癒えるには、偶像を拝み、不正を行っている彼らが、その罪を悔い改めないといけません。ところが、その病の原因となっているともいべき部分を取り除くことなくして、ただ傷口に何かちょっとあてがって、「平和だ」と言っていること。これが、預言者たちの偽りだったのです。

私たちが、キリストに自分を従っていないくとも、他の人々が普通に、平和に安全に暮らしているように生活していることができるでしょう。信仰から離れることができます。あるいは、自己流の信仰、つまり主の名を使って、偶像礼拝をすることもできます。それらのことをしても、そう大して生活に支障が来ないのかもしれませんが。それをサルデイスの教会では、「生きているとは名ばかりで、実は死んでいる。」とイエス様が言われた状態です(黙 3:1)。安住しているところに、突然の破滅がやって来るのです。イエス様は、続けてサルデイスの教会に言いました。「3:3 だから、どのように受け、聞いたのか思い起こし、それを守り、悔い改めなさい。目を覚まさないなら、わたしは盗人の

ように来る。わたしがいつあなたのところに来るか、あなたには決して分からない。」

「産みの苦しみ」のようであり、免れることはできないと言っていますね。イザヤも主の日についての預言で、その比喩を使いましたし(13:8)、イエス様が、民が民に、国が国に敵対することや、地震や飢饉が来ることを、産みの苦しみの始まりと形容されました。私たち人間は災いについて聞くと、なぜか「自分は免れることができる」と思ってしまいます。すでに心理学で、「正常性バイアス」という言葉があるように、津波が来ると言われても、日常のことをしてしまうようなバイアスがかかると言われていますね。霊的にも、「自分は免れることができる」というバイアスがかかるのです。だから、預言者も主ご自身も、産みの苦しみに形容されたのです。

2B 救いの望み 4-11

ここまでが、主の日についてのことです。しかし、この日から、キリスト者が救われることをパウロは次に話します。

1C 身の慎み 4-8

⁴ しかし、兄弟たち。あなたがたは暗闇の中にいないので、その日が盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。⁵ あなたがたはみな、光の子ども、昼の子どもなのです。私たちは夜の者、闇の者ではありません。

キリストを信じる者たちは、暗闇の力から救い出されて、光の中に招き入れられました。「コロ 1:12-13 また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることが出来ますように。御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。」ですから、今、私たちは光の中を歩むように、召されています。「エペ 5:8-9 なたがたは以前は闇でしたが、今は、主にあつて光となりました。光の子どもとして歩みなさい。あらゆる善意と正義と真実のうちに、光は実を結ぶのです。」

ですから、光のうちに歩んでいる人は、「盗人のようにあなたがたを襲うことはありません」と言っています。光そのものであられる方が来られても、自分が光のうちに歩んでいるので、それほど驚くことはありません。主ご自身の栄光について、また天にある栄光について、礼拝において、御霊によって、信仰を通して見つめている人々にとって、主が来られることはその礼拝の延長です。これまで、おぼろげに見ていたものが、はっきりと見えるようなものです。「I コリ 13:12 今、私たちは鏡にぼんやり映るものを見っていますが、そのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知るようになります。」

⁶ ですから、ほかの者たちのように眠っていないで、目を覚まし、身を慎んでいきましょう。⁷ 眠る者は

夜眠り、酔う者は夜酔うのです。

今、話しましたように、主が来られることを期待して、光の中に留まっていること。祈り、礼拝し、主の命じられたことに従っていくような時、それが目を覚ましていることです。それから外れることが、眠っていることです。

そして、「身を慎んでいましょう」というのは、素面(しらふ)でいることです。酔っていない状態です。酔っているというのは、自分がどういうところに置かれているのか分かっていない状態です。麻痺させられている状態です。滅びが迫ってきているのに、完全に無頓着な状態です。

黙示録 18 章に、大きな都バビロンが突然、滅びる姿が出てきます。そこに「魔術に惑わされている」という言葉が出てきます。「18:23-24 ともしびの光も、おまえのうちで、もはや決して輝くことはない。花婿と花嫁の声も、おまえのうちで、もはや決して聞かれることはない。というのは、おまえの商人たちが地上で権力を握り、おまえの魔術によってすべての国々の民が惑わされ、この都の中に、預言者たちや聖徒たちの血、また地上で屠られたすべての人々の血が見出されたからである。」この「魔術」の言葉は、薬物を使って魔術をするような意味があります。幻覚や幻聴を見ているような状態です。酔いしれて、自分が何をしているのか分からない、見えていない状態と同じような表現です。そこで、日常では花嫁花婿の声のようなもの、その一方で、預言者たちや聖徒たちの血、まるでいけにえが屠られるように、人々が血を流している状態です。当時のローマ社会では、コロッセウムで有名ですが、人々が殺し合い、猛獣に喰い殺されるのを、人々が娯楽として鑑賞していました。

これが夜酔っているような状態です。私たちが、キリストから目を離さないで、しっかりと光の中にいなければ、怒濤の如く襲ってくる世の流れがあり、その中に呑み込まれてしまいます。そして、魔術のように全く、現実からかけ離れたものを見せられて、その中で過ごすようになります。だから、主が来られたら、その突然の破滅の中で、産みの苦しみのように悶え苦しむのです。

⁸しかし、私たちは昼の者なので、信仰と愛の胸当てを着け、救いの望みとかぶとをかぶり、身を慎んでいましょう。

「昼の者」ということですが。主イエスご自身が世の光であられ、主が来られることを、明けの明星のように、預言の中で心に留めておきなさいとペテロは、第二ペテロで話しています。「1:19 また私たちは、さらに確かな預言のみことばを持っています。夜が明けて、明けの明星があなたがたの心に昇るまでは、暗い所を照らすともしびとして、それに目を留めているとよいのです。」そして、主が来られたら、義の太陽のようにすべてが明るくなります。「マラ 4:2 しかしあなたがた、わたしの名を恐れる者には、義の太陽が昇る。その翼に癒やしがある。あなたがたは外に出て、牛舎の

子牛のように跳ね回る。」

そこで、今、武具を身に付けなさいとパウロは言います。信仰は戦いであることを、パウロは何度となく話しています。エペソ6章に、霊の戦いについて語っていますね。これまで手紙の中で、テサロニケの人たちが信者の模範となっていた、信仰と愛があります。それを胸当てとします。心を信仰と愛で守ります。そして、ヘルメットは私たちの命を守るための非常に必要なものですが、それは、「救いの望み」であります。それが、今、話している、光の中におられる主が来られることの望みです。このようにして、しっかりと、霊的に素面のままでいるのです。

2C 共におられる主 9-11

⁹ 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。

パウロは、ここで、「そもそも」の話をしています。主イエス・キリストによる救いには、神の御怒りからの救いがあります。「ロマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」すでに、キリストの流された血によって、神の御怒りは宥められた、そこにある正しい裁きは満たされました。ですから、なおさらのこと、将来、注がれる御怒りから確かに免れます。

そして、その御怒りとは、地上に下る患難があるということです。次回、第二テサロニケに詳しく書いていますが、患難の中に二種類があります。一つは、世から来る私たちへの患難があります。それは悪魔が世を支配しているために受けている苦難です。もう一つは、そうした世に対する裁きとしての患難があります。それが、この御怒りなのです。しばしば、患難からの救いを話すと、この世における患難と混同して、私たちキリスト者が苦しみを避けている、と批判する人たちがいます。そうではありません、神が御怒りを現わすための患難から、私たちは救われるのです。

¹⁰ 主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きるようになるためです。

主が、私たちのために死んでくださいました。それは、主と共に生きるためです。主が死なれた時に私たちは死に、主がよみがえられた時、私たちもそのいのちにあずかりました。そして、このことが、目を覚ましている、ここでは肉体が生きている時も、ということであり、眠っているというのは、肉体が眠っている時も、ということです。主が天から降りて、死者をよみがえらせ、生き残った者たちと一緒に引き上げてくださるのは、主が共にいてくださるようになるためです。

¹¹ ですからあなたがたは、現に行っているとおりに、互いに励まし合い、互いを高め合いなさい。

これが、私たちがしなければいけないことです。キリストにある希望をもって、信仰と愛をもって、励まし合い、高め合うのです。ヘブル人への手紙でも、同じことが書かれています。「10:23-25 約束して下さった方は真実な方ですから、私たちは動揺しないで、しっかりと希望を告白し続けようではありませんか。また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょう。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」

2A 互いの間の平和 12-22

互いに励まし合いなさいという勧めの次は、互いに平和を持っているという勧めを行います。

1B 訓戒の働き 12-15

¹² 兄弟たち、あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人たちを重んじ、¹³ その働きのゆえに、愛をもって、この上ない尊敬を払いなさい。また、お互いに平和を保ちなさい。

教会の中で、信仰の働き、愛の労苦があります。そこにおいて大事なものは、秩序と平和に満ちているということです。小さな子どもが、愛している親、また父と母が愛し合っているという秩序があつてこそ、子が親に従い、養い育てられます。それと同じように、主にあつて指導している人々を重んじるということで、その平和と秩序が保たれます。

指導者の人たちがしなければいけないのは、「労苦する」ということです。愛によって労苦していることです。その労苦をもって指導し、訓戒していくことが必要です。そして、その指導を受けている人々は、愛をもって尊敬します。ただ尊敬するだけでなく、愛をもって尊敬します。

指導者の誘惑は、嫌々ながら、強いられて指導することです。いうことを聞いてくれないとか、いろいろな理由で、その指導がかつたるいもの、義務的なものになる誘惑があります。また、模範を示すのではなく、支配することによって指導する誘惑もあります。(1ペテロ 5:2-3) そうではなく、心を込めて世話をし、群れの模範となります。

そうすることによって、人々は愛をもって、指導し、訓戒している人を尊敬することができます。始動を受けている時に、自分がどれだけの労苦をもって養われているかを認められない時があります。コリントの人たちは、パウロたち使徒に愛されているのに、それゆえにますます自分たちはひどいことをされていると思っていました。心が開いていないので、自分は支配されていると感じていました。しかし、成熟した人は見分けることができます。愛をもって労苦し、訓戒している人がだれであるかを、見分けることができます。

そして、こうした相互関係があると、「お互いに平和」があります。自分が正しいことを主張している時に、本人は正しいと思っていますが、もっとも正しいことを行っていません。なぜなら、そうした平和のない状況を造り出すことによって、人々は愛ではなく、恐れに駆り立てられるように自分が仕向けているからです。人は、平和であるかどうか、愛があるかどうかを見えています。

¹⁴ 兄弟たち、あなたがたに勧めます。怠惰な者を諭し、小心な者を励まし、弱い者の世話をし、すべての人に対して寛容でありなさい。

この勧めの背景には、4章 11-12節で見たように、仕事をしないで、人のお節介ばかりしているような人たちがいたことがあります。そういった人々を諭します。これも、平和に関わりますね。そうした言わなくてよいことを言って、人々の心を乱している人に対して、諭さないといけません。けれども、その反対に、「小心な者を励」まします。諭している時に、反応しなくてよい人が反応することがよくあります。臆病になっているからです。そういった人々には、励ましを絶えず与えないといけません。そして、弱い者の世話をしますね。

そういった働きをしていながら、絶えずいろいろな人に対して、寛容であることに努めます。寛容であることは、それぞれの人々に異なる状況に対して関わっていくことです。寄り添っていくことです。助けるのが難しいと感じる人々に、それでも主の力で助けることです。

¹⁵ だれも、悪に対して悪を返さないように気をつけ、互いの中で、またすべての人に対して、いつも善を行うように努めなさい。

悪いことをされたら、悪いことで仕返したくなるのが常です。けれども、善をもって応答します。互いに、つまりキリスト者の間で悪をはかることがあるということです。そして、すべて、つまり教会外の人たちに対しても同じです。善を行うということは、いろいろと損をします。徒労に終わることのほうが多いです。けれども、それでもあきらめることなく善を行うのです。

2B 喜び、祈り、感謝 16-18

こうして、互いにある関係についての勧めをパウロは行いました。次は、一人一人の心の中における、霊的な働きを勧めています。

¹⁶ いつも喜んでいなさい。¹⁷ 絶えず祈りなさい。¹⁸ すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられることです。

主のみこころは何か？ということで、4章では、「あなたがたが聖なる者となることです。」とありました(3節)。ここも、神が望んでおられることとして、喜ぶこと、祈ること、感謝することです。しかも、

それが絶えず行うこと、あらゆるところで行うこととして勧めています。喜んでいることですが、どうして悲しいことの中にも喜びがあり得るのでしょうか？これは、主イエスにある関係から来ています。状況は悲しむべきことですが、主にあって喜ぶのです。主がおられるから喜べるのです。次に、祈ることが絶えず、ということですが、これは祈禱室に 24 時間いなさいという意味ではありません。そうではなく、どんなことをしていても、心で祈りの姿勢を保っていなさいということです。だから、どんなことでも、主に抛り頼むことだということです。そして、感謝をすべてのことにおいて行います。主がすべてのことにおいて、主権をもっておられることを認め、それで感謝します。

3B 預言の賜物 19-22

個人的な霊的営み、喜び、祈り、感謝の次は、公の集まりにおける霊的な営みです。

¹⁹ 御霊を消してはいけません。²⁰ 預言を軽んじてはいけません。²¹ ただし、すべてを吟味し、良いものはしっかり保ちなさい。

御霊の働きが、しばしば火として形容されることがありますね。火として現れたことさえあります。五旬節の時に、炎の舌のようなかたちをして、聖霊に弟子たちが満たされました。パウロは、この教会の人たちに、ますます愛し合いなさいであるとか、ますます豊かになることを勧めていました。御霊が働かれているのを、それをどこかで止めてしまうと、ここで言っている「御霊を消す」こととなります。

そして、御霊の働きの大きなものの中に、預言の賜物があります。主が御霊によって、人に言葉を与えられます。それを語るのです。聖書自体が預言のことばであります。そして、聖書のように普遍的な真理ではないけれども、その集まりにふさわしい、主の語りかけを誰かが預言によって語ることもあります。コリント第一 14 章では、預言の賜物を熱心に求めなさいとあります。なぜなら、人々の徳を高め、慰め、励ましになるからです。

けれども、預言の時に気をつけなければいけないことがあります。吟味をすることです。すでに主が啓示しておられるみこころに、沿ったものであるかどうかを吟味します。預言だと名乗っているものの中で、全く徳を高めないものがありますし、偽預言もあります。以前、私は、ある人が預言だと称して、カルバリーチャペル・ロゴス東京はその年の内に消滅すると言われました。偽預言ですね。こうやって吟味して、良いものはしっかりと保ちます。

²² あらゆる形の悪から離れなさい。

いろんなものがある中で、悪と呼ばれているものはどんなものでも避けます。いろいろな形で悪が現れます。どんな形であろうと、それを離れるのです。良いものは見分けて、それを求めて行き、

そうでないものは捨てて行きます。

3A 最後の祈り 23-28

そこで、テサロニケ人への、この第一の手紙で、繰り返し出てくる内容をもって祈ります。聖なる者として主の前に立つことができるように、という祈りです。

1B 全人的な守り 23-24

²³ 平和の神ご自身が、あなたがたを完全に聖なるものとしてくださいますように。あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが、私たちの主イエス・キリストの来臨のときに、責められるところのないものとして保たれていますように。

パウロは、平和について勧めの中で語っていました。お互いに平和を保ちなさい、と言っていましたね。その平和の神ご自身が、私たちを「完全に聖なるものとしてくださいますように」と祈っているのです。そんな、完全に聖なるものにどのようにしてなることができるのか？と思います。しかも、次は、「あなたがたの霊、たましい、からだのすべてが」責められることのないように、と祈っているのです。人は、霊、魂、そして体に分れていることを聖書は教えています。霊は、神が人を造られて、ご自分の息をふきかけられたものです。神と人は霊においてつながっています。そして、からだは、見ての通り、肉体のことです。そして、魂はその中間と言ったらよいでしょうか、知情意と呼ばれるようなところ。そのすべてにおいて、全く聖なる者になるようにと祈っています。

そんなことがどうして可能なのか？「私たちの主イエス・キリストの来臨のとき」とあります。主が、戻って来られる時に、私たちのために栄光のからだを用意してくださっています。「Iヨハ 3:2 愛する者たち、私たちは今すでに神の子どもです。やがてどのようになるのか、まだ明らかにされていません。しかし、私たちは、キリストが現れたときに、キリストに似た者になることは知っています。キリストをありのままに見るからです。」このように変えられます。けれども、これを祈りとしています。つまり、私たちは自動的に栄光のからだに変えられるのではなく、全き聖なる者になるという願いと祈りがあってこそ、来臨の時にそのように変えられる、ということなのです。

²⁴ あなたがたを召された方は真実ですから、そのようにしてくださいます。

私たちが到底、そのように変えられるとはないと感じてしまいます。何度も失敗してしまいます。けれども、主は真実な方です。必ずそのようにして下さるのです。

2B 最後の挨拶 25-28

²⁵ 兄弟たち、私たちのためにも祈ってください。

祈りの内容としては、道が開かれるように祈ってほしいということを書いていました。また他の手紙では、福音が大胆に語られるようにとの祈りの要請をしていました。

²⁶ すべての兄弟たちに、聖なる口づけをもってあいさつをください。

聖なる、ということばが大事ですね。聖なる者として生きる中で、親しみを込めて挨拶することは大事です。口づけは、中東や地中海沿岸においては、挨拶の表現です。私たちも挨拶するところにある、兄弟愛の交わりがあります。

²⁷ この手紙をすべての兄弟たちに読んで聞かせるよう、私は主によって堅く命じます。

すべての兄弟と言っていますから、パウロは、テサロニケの人たちはもとより、すべての信者に読んでほしいと願っていることがわかります。つまり、この手紙の内容は、地域的なものだけではなく、すべての教会に共通する普遍的なものです。これは、テサロニケの特別な状況があるから、例えば、主の来臨をパウロは強調しているのだ、ということではないのです。

²⁸ 私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたとともにありますように。

すべては、恵みです。主イエス・キリストの恵みです。恵みの教えがなければ、他のあらゆる教えは偽物であります。恵みがあって、初めてこれまでパウロが語って来た真理が真理となります。